

ジャックと生きる木　　～最期の約束～

P5～

第三作品目。

「タイムリープもの × 意味不明な展開」な物語。
ちゃんと世界観について来ててください。
以上。

△注意書き▽

・ 本文の中に、多少のショッキングな表現があるかもしれないです。
（正確に言うと、ショッキングな表現になるように頑張って書いてます。温かい目で見守ってください）

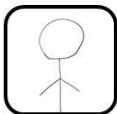
・ 本文の中で、多少の表記ゆれ・矛盾がある可能性があります。
（「伏線なのかな？」って感じで許してください。伏線を作るほどの実力はないので、多分伏線じゃないです）

〳ギリギリネタバレじゃない目次〳

- ・ 3 ページ〳 登場人物紹介
- ・ 5 ページ〳 Chapter1 Section1 「しょうもないプロローグ」
物語の始まりです。
- ・ 15 ページ〳 Chapter2 Section1 「学校へ」
ジャックがタイムリープするシーンです。
- ・ 22 ページ〳 Chapter3 Section1 「リターン」
タイムリープから戻ってきたシーンです。
- ・ 27 ページ〳 Chapter3 Section3 「不当判決」
エンディングです。
- ・ 58 ページ〳 Chapter6 Section1 「ハッピーエンド..」
こっちが本物のエンディングです。

人物紹介的なの！

<主人公>



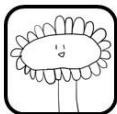
主人公だけど、
別に偉くはない。



オクパシー・ジャック

生きる木

<植物科>



ひまわり

生きる木によって
集められた精鋭たち。



チューリップ



苔



シロツメクサ



薔薇

※絵は全てイメージです

<ジャックのクラスメート>

・伊藤華燐（いとうかりん）

何考えてるか分からない人。

・佐藤千夜（さとうちよ）

夜の訪れと共に動き出す…訳ではない。

・時板愛美（じいたあいみ）

この中では一番のしっかり者。

・新陀美紀子（にいだみきこ）

みんなのアイドル的存在。面倒くさい。

・矢野弘明（やのひろあき）

愛美の次にしっかり者。めっちゃ優しい。

・蒼龍義浩（そうりゅうよしひろ）

ジャック達のクラスの先生。学校の立場的には偉い。

ジャックと生きる木　　～最期の約束～

製作者…なつ

Chapter1 何が来た？

Section1 しょうもないプロローグ

「はい、どーもー！ジャックでーす！」

「木でーす！　二人合わせて……」

「ジャックと生きる木でーす！」

「……って、そのまんまやないかい！」

「はい！　えー、今回の動画はですねー、私たちのですね、事件相談所をですねー、えー、紹介したいと思います！」

「これがその相談所ですか、ジャックさん？」

「はいっ！」

「えっ……段ボー……」

「えー、部屋には一面に、段ボールの絵を敷き詰めています。えー、この相談所では、どんな事件でも解決しちゃいます！」

「電話番号は、0120-XXX-XXXXでーす！お待ちしております！」

「はい、では、次の動画で！ バイバイ！」

……俺はジャック。

今は MeTube で動画を出す、MeTuber。

事件相談所を開設したが、人が来なかったなので、紹介動画を作った。

「ねー、ジャック？ アップロードして良いんだよね？」

「うん」

「お！ 早速一万回再生！」

「はやっ!？」

プルプルプル……

電話!？ はやっ!？

「木ー、ちょっと電話出てー」

「分かったよー！」

Section2 依頼が舞い込むー

「実は……飼っていた犬がどこかに消えてしまったんです
と、20代の女性。」

「その犬って……？」

「公園で犬の散歩させていたんです。そしたら、私の犬が木登りをし始めたんです。そしたら、ちょっと目を離れた時に、木ごと消えていたんです……」

「木ごと………はっ！ 生きる木！ ちょっと葉っぱ見せて！」

「ん？ あっ」

生きる木の葉っぱの中を見ると、かわいい犬がいた。

「ワンッ！」

予想通り、その公園にいた木は、生きる木の事だった。

「あ、ありがとうございます！」

「実は……私の話を聞いて欲しいんです」

と、怪しいおじいちゃん。

「はあ……話って……？」

「この世界の神話の話を聞いていただきたいんです」

まあ、面倒くさそうだけど、謝礼はたっぷりありそうだし……

「契約と審判という話を聞いたことがありますか？」

生きる木の枝の一本がピクツと動く。

「生きる木？ 知ってるの？」

「うん。植物科で話を聞いたことがあるんだよ。ひまわりたんが教えてくれたんだ」

「そうなの？ 教えてくれる？」

「うん。昔、罪を犯した人は、神様が直々に審判を下すんだけど、神様は審判を下した後、罪

の償いを求めるんだよ。けど、神様は選択肢を与えるんだよ。『ここで死ぬか、時をさかのぼってやり直すか』っていう選択肢を」

何その神話……神が審判するって……

「この選択肢を契約って言うんだけど……まあ、その……その、神と審判と契約をするっていう話が『審判と契約』っていう神話なんだよ」

あ、おじいちゃんが言う前に全部言っちゃったよ……

「私の話を聞いていたできたかったです……」

「ご、ごめんなさい……」

「とりあえず………神様が誤った審判をしてしまう前に、我々の神様がいる宗教に入りませんか？」

あー、やっぱり勧誘か……

「おーかーえーりーくーだーさーい！」

とりあえず、おじいちゃんを相談所から追い出した。

「生きる木、覚えておいてね……新居には、宗教勧誘とか変な人が来るんだよ……」

「う、うん。分かった。覚えておくよ……」

「実は……自社サーバーがハッキングされたんですよ」

と、スーツを着た若い男性が話し始めた。

「で……要件は？」

「わが社のように、ハッキングの被害を受けないためにも、とあるセキュリティソフトの紹

介を……」

また、怪しい奴か……

「おかえりください。どうせ詐欺商品なんですよ？」

とりあえず、おじいちゃん同様、この若い男性も追い出した。

「もうちょっと、ましな事件こないの？」

「うーん、次の事件はかなりいい感じだと思う。ジャックも期待しなよ」

Section3 事件

実は……と相談者が話し始めた。

「ある、未解決事件を解決してほしいんです」

「未解決事件とは？」

「1995年小学6年生女兒殺人事件……」11歳の少女が何者かによって殺害されました……こちらがその資料です」

「ほう……わかりました」

「ねえ、ジャック……本当にあの事件を引き受けていいの？」

「ん？　なんで？」

「あの事件は、この 25 年間解決されていないどころか、証拠の一つもないんだよ？」
つまりは、捜査は難航するっていうことか。

でも、それを解決してこそ、事件相談所だ。

「大丈夫。俺たちなら解決できるよ！」

「おー、今日のジャックは頼もしいね！」

Section4 石川の実家

私たちは事件の調査の為に、事件があった石川に向かった。

実は石川県は、俺が小学生の時に過ごしたところだ。

小学生になるときに、石川に引っ越して来て、中学生になるときに離れた。

昔住んでいた家は、既に売り払っている。

僕は、よくお世話になっていた、茂おじちゃんの家泊まることにした。

「その……生きる木くんは、ジャックのお友達かい？」

「ええ。身長はバケモノみたいですけど、人間ですよ。ね？」

「う、うん……（木であることを隠すために、変装してるけど、意外とばれないんだな……）」

茂おじちゃんは、30 階建てマンションの 24 階に住んでいて、この高さだから、眺めが最高

だ。

「ジャック、もうそろ調査に行こうよ！」

「展開急すぎ……まあ、でも行かないとね」

ずっとのんびりするわけにもいかないしね！

「じゃあ、茂じいちゃん！ ちょっと行ってくるね！」

「ああ、気を付けるんじゃぞ……」

Section5 調査開始

1995年小学6年生女児殺人事件。

この事件では、11歳の少女が何者かの手によって殺害された。

警察はずっと、調査をしていた。

しかし、解決するどころか、証拠の1つも見つからなかった。

情報提供者には、最大200万円の報酬が渡されるという話だったが、事件発生から5年後、時効前なのに、警察が捜査から手を引くとの発表があった。

今も、ボランティアの人が、任意での調査を行っているが、証拠は見つかっていない。

この事件で分かった事と言えば、冬の寒い日……11月18日に殺されたという事だけだ。

「ここが、殺害された少女が通ってた小学校だよね？ ジャック？」

「実はさ、俺……この学校にいたんだよ」

本当なんだ。更に言うと、殺害された子と同じ教室にいた。

同学年なんだ。友人だった。

「え？　つまりそれって……」

殺害されたのは新陀美紀子。

みきとか、みきっちとか、みきちゃんと呼ばれていた。

同じクラスの友人。

隣の席だった。

「とりあえず、家に一回帰ろうか。あの時の学校の資料から何かが分かるかもしれないしね」

「え……ジャックは働き者だな……」

Section6 逃走

俺とジャックは家に帰った。

「ただいまー茂おじちゃん」

返事がない。

家の鍵は開いているのになぜだろう。

「おーい……茂おじちゃん？」

「茂おじちゃ……!」

そこには、包丁で刺された茂おじちゃんがいた。隣には、小学6年生女兒殺人事件の新聞のスクラップが置いてあった。

うつ伏せになつてゐるのを仰向けにしたら、刃物の刺し跡があった。

さらに運悪く、小学校の時の担任の先生が来た。

「お、ジャック君じゃないか! 来てたんだね! それなら連絡してくればいいの………」
その手の血……それにその倒れてる人……」

まずい! さっき茂おじちゃんの向きを変える時に、手に血がついてしまっていた!

このままじゃ疑われる! 逃げなきゃ!

俺は周りも見ずに、とりあえず玄関から離れ走り逃げる。

「えっ、」

ふと気が付くと、視界にはマンションの下の地面が写っている。

「あっ、(察し)」

どうやらベランダから落ちているんだ。

死ぬ。

落ちてゐる時間はほんの数秒なはずなのに、俺にはとても長く感じた。いつしか回転して背中から落ちていた。

「ああ……」

俺は目をつぶって、これから来る、地獄の時間を迎えようとした。

「うっ！」

俺は背中に負傷を負った。しかし24階から落ちた衝撃とはかけ離れているくらい弱かった。多分即死なはずなのに。

そして、誰かの声が聞こえる。

「起きなさい！ 遅刻するわよ！」

母？ いや、とても若い声だと思って目を開けると、小学校6年生くらいの時にみた母が、「ジャック？ 遅刻して良いの？」

と言った。

俺は瞬時に勘付いた。

これは時間が戻っているんだ。

タイムリープだ。

カレンダーを見ると、「1995年11月10日」と書かれていた。

「やっぱり……戻ってるんだ」

1995年は、小学6年生……そして、小学6年生女兒殺人事件の年、そして、俺が通っている学校は……その事件の美紀子がいた学校。

神は、俺を事件解決の為に過去に戻した。

すなわち、美紀子を救うチャンスをくれたんだ。

……よし、しっかり仕事をこなさないとい！

Chapter2 過去に戻る

Section1 学校へ

「あ！ 蒼龍（そうりゅう）先生おはようございます！」

「ああ、おはよう」

ここは、小学校の6年3組。

一言でいうと、荒れているクラスだ。

そして俺の隣の席が美紀子。

美紀子が家に帰ったらそのまま行方不明になり、遺体が見つかった。

美紀子は、家庭内暴力を受けていて、警察の調べでは、美紀子は母さんの手によって殺され
たんではないかという説が、一番有力だった。

俺の考えでは、美紀子があの日に家に帰らなければ大丈夫なんだと思っている。

×デイは一週間後。

×デイに美紀子を家に帰らせなければ……

よし、友人たちを募って美紀子を帰らせないようにしよう。

Section2 XDAY

そして今日は×デイ前日。準備は万端！

奇跡的にも、明日は美紀子の誕生日。

それなら、誕生日パーティーを開催すれば……

「みき！」

「ん？ ジャック君じゃん。どうしたの？」

俺は、何も情報を与えないようにして、パーティーに誘うことにした。

もし、誰かに相談されたら大変かもしれないし。

「ちよっと今日付き合ってくれない？」

「えっ………告白？」

「ちやうわ！」

美紀子の声が教室中に響いて、周りが茶化してきた。

「ジャック！ アツいね！」

面倒くさいことになった。

余計面倒くさくなるかもしれないけど、今は仕方ない。

俺は美紀子の手をつかんで教室の外に出る。

「きゃっ！」

「ちよっと失礼しまーすう！」

人混みをかき分けて、教室の外に出た。

校舎裏までくれば大丈夫だろう。

「で……どうしたの？」

今さら考えてみると……女子と2人きりで校舎裏だなんて……

俺は頭が真っ白になりかけたが、言葉を絞り出した。

「あ……あの、今日家に来れる？ 遊ぼうよ！」

「えー、女子を家に連れ込むっていうの？ ジャック君……」

なんかこいつ面倒くさいな。

「クラスの人もいるから！ っていうかその言い方やめてよ……」

「えー……まあいいよ……変なことしないよね？」

おちよくってるんすかねえ？

まあでも、これで×デイに美紀子を、家に帰らせないように誘導さえすれば！

いや、「家に帰さないから」とか言ったら、また面倒くさいことになりそうだから、今は言わないでおこう。

そして、学校が終わった。

今日の作戦に協力してくれるメンバーは沢山いる。

あの時代の俺は、友達が多くて、割と冗談でも色々付き合ってくれる友達が多い。

時板愛美、ニックネームは「あいばっど」。

佐藤千夜、ニックネームは「よっち」。

矢野弘明、ニッケネームは「あつきー」。

伊藤華燐、ニッケネームは「かりん」。

あいばっどだけは、小学5年生の時、つまり最近転校してきたばかりなのだ。美紀子が女子だからか、協力してくれるメンバー、4人中3人が女子だ。

まあ、あつきーには申し訳ないが、男子は俺とあつきーの2人だけだ。

「みんな、今日は協力してくれてありがとう！」

「あいばっどは、みきをジャック君の家に連れて行って」

かりんは、作戦のプロデューサーになった。

「よっちはあつきーと、パーティーのお菓子とか、色々なものを買ってきて」

「かりんは？ 何するの？」

僕がそう聞くと、自慢げにかりんが答える。

「よくぞ聞いてくれた！ 私は、家でパーティーの準備をするよ！」

要するにサボリだな。

「じゃあ、僕はよっちと一緒にイオンに行ってくるね」

あつきーとよっちのコンビ……っていうかカップルは、仲がいい。

スキップしながら、2人はイオンへと向かった。

「じゃあ、私はみきを連れてくるね！」

そういうと、あいばっどは美紀子のところへ向かった。

「じゃあ、ジャック君は、一緒に家に行こっか」

そして、自分の家へかりんと一緒に向かう。

家の装飾はかりんが全部やって、片付けとかは俺がやった。
結構キレイになったし、装飾もすごい綺麗だ。

「さすがかりん……」

そして、買い物に行ってた、あっきーとよっちが返ってきた。
あいぱっどからも連絡が来て、もうすぐ来るとのことだった。
「これで、いつでも始められるね！」

そして、美紀子が来て、パーティーが始まる。

Section3 全つの始まり

「……明日だけど、お誕生日おめでとう！ みき！」

俺がそういうと、みんなが準備していたクラッカーを打った。

「わあ！ みんな！ ありがとう！」

美紀子は嬉しそうだ。

パーティーが実施できてよかった。

「じゃあ……お菓子でも食べよっか！」

よっちがそう言うと、みんなが盛り上がった。

「いいね！ 食べよ、食べよ！」

そして、パーティー開始から時間が経ち、午後9時27分。
急に家のインターホンが鳴る。

「ピンポン」

ん？ こんな時間になんだ？

さすがに夜9時に来る人なんて不審者ぐらいしか……
とりあえず出ることにする。

「はい？」

目の前の道路には、車が止められている。

そして女性がいる。

「夜分遅くにすみません……」

誰だろう。見たことがない人だ。

そして、目の前の女性が、家の中に向かって大きな声で言う。

「美紀子！ ちょっとおいで！」

こいつ、美紀子の母親だ。

警察の調べ、俺の考えでも、母親が犯人の可能性が高い。
いや、多分犯人なんだろう。

「えっ？ お母さん？」

まずいつ、このまま美紀子が母親のもとに行ったら、そのまま殺されるかもしれない。俺が、美紀子を母親のもとに行かせないようにしようと、手を広げて玄関をふさぐと、母親が左腕で、俺の両腕を力強く掴んで、右腕で美紀子を連れていく。

左腕一本に負けている自分が情けなく思える。

美紀子は、そのまま車に連れ去られていく。

「おい！ 待て！」

無情にも、美紀子を乗せた車は発進した。

「……くっそ……」

同時に、視界が明るくなってぼやけていく。

「戻る……のか……」

「はっ！」

「ジャック、起きて！ ここも勘付かれたよ！ 早く行こう！」

目の前には生きる木が焦った表情でこっちを見ている。

パトカーのサイレンが聞こえる。

「勘付かれた……って？」

「何言ってるの?! ジャック！ とりあえず行くよ！」

俺は生きる木に連れられて外に出る。

Chapter3 戻って来る

Section1 リターン

とりえあず、新幹線に乗って落ち着いた所で俺は生きる木に聞く。

「ねえ、勘付かれたってどういう事？」

「え？ 一緒にニュース見たじゃん！」

「どういう事？」

「1995年の少女誘拐殺人事件の犯人として、今警察に追われてるんじゃない！」

もしかして、過去が変わったのか？

「ちょっと、そのニュース見せて！」

俺は生きる木からスマホを借りて、ニュースを見た。

ハンジキも1995年の少女誘拐殺人事件の犯人の情報が提供される

1995年11月19日に起きた、少女誘拐殺人事件の犯人に関わる情報が、匿名で提供された。容疑者は「オクパシー・ジャック」。

オクパシー・ジャック容疑者は、新陀美紀子さんと同じ学校の、同じクラスにいた。
二月一日に、クラスメートを集めて、新陀美紀子さんの誕生日パーティーと称して、家に連れ込んだ。そして、二月五日まで家に監禁して殺したとされている。

警察は、オクパシー・ジャック容疑者の住んでいる、東京の自宅を家宅捜索することにした。

「ジャックは容疑者なんだよ！ 覚えてないの？」

多分、あの母親が虚偽の情報を提供したんだろう。

でも、あいぱっど、よっち、あっきーやかりんは？

皆なら、ちゃんとした情報を伝えるはずなのに。

もしかしたら口止めされているのかもしれない。

……ん？ よく見ると、殺害日が一日遅れている。

パーティーの影響で、殺害日を遅らせることが出来たんだろう。

「あのさ、木？ ちょっと言っておきたいことがあって……」

俺は生きる木に、一度過去に行って、過去を変えられたことを伝えた。

「ええ……さすがに信じられないな……」

当たり前だよな……

「あ、じゃあ、次過去に戻ったら、僕の家の手紙でも送ってよ！ そしたら信じるよ！」

確かに、過去で手紙を送れば信じてくれるだろう。

生きる木の元の住所も知ってるし、送れることは送れる。

でも、いつ過去に戻るかは分からない。

「まあ、今は逃げよう。過去に戻れたら送るよ……」

「じゃあ、今は逃げることに集中しよう！」

だが、ここは新幹線。

もし包囲されていたら、もうおしまいだ。

あれ……今のって……フ……ラグ……？

「動くな！ オクパシー・ジャックだな！ お前に、殺人の容疑で逮捕状が出ている。故に逮捕する！」

警察だ。新幹線に乗ってたんだ。

俺は逃げる。

当たり前だ。ここで捕まったらおしまいなんだから。

けど、それは無駄だった。

「包囲しているに決まってるだろうが………確保！」

逃げようとした先にも警察がいて、俺は手錠をかけられる。

「くっそ！ 離せよ！」

俺は石川県の金沢駅から、北陸新幹線「かがやき」に乗っている。富山駅を過ぎたので、次に止まるのは長野駅だ。それまであと40分ぐらい。

そのまま数分間、車両と車両の間のデッキで俺は身柄を拘束された。

40分もあれば、もしかしたら逃げ出せるチャンスができるかもしれない。

何か逃げ出せるためのチャンスが出来れば……

「……生きる木！」

俺はあたりを見渡す。すると……

デッキの車窓から、山に植えられた生きる木が見えた。

「……えっ？」

まあ、新幹線に木が乗るっていうのもおかしい話だ。木があるなら、元あった場所に植えなおすのが筋……かどうかは分からないが……

けど、こんな迅速に植えるか……？ まだ数分しかたっていないぞ……

結局、生きる木の助けも借りられずに長野駅についてしまった。

「よし、着いたな。お前はそのまま留置場に送られる」

「りゅうちじょう？」

残念なことに、俺は全く刑事ドラマとか見てないから分からない。逮捕されたら即刑務所かと思っただ。

「警察署の中にある、逮捕された奴が行くところだ。お前、逮捕されるの分かっただけで新幹線乗ったんだろ？ ちゃんと勉強しておけよ……」

いや知らんがな！

そうして、そのままパトカーに乗って警察署へ向かう。ちょっと車酔いしたけど……

そのまま警察署に送られて、さっそく取り調べが始まる。

「まあ、一応言う決まりになってる文章があるから、先にお前に伝えるぞ」

言う決まりになっている文章？

「お前の供述は、法廷でお前にとって不利な証拠として用いられることがある。だが、お前には黙秘権がある」

これは、権利の告知（ミランダ警告）？

アメリカの連邦最高裁が決めた法手続きの一つで、アメリカでは言う決まりになってる奴だ！ 日本では、逮捕した被疑者を警察署などに引致したときに言うことになってるんだっけ。

「お前には、弁護士の立会いを求める権利がある。もし、自分で弁護士に相談できる経済力がないなら、国選弁護士……まあ、国が選んだ弁護士をつけてもらえる権利がある」

「大丈夫。それぐらいは分かってるよ」

ただ、これで黙秘する訳にもいかなない……もし黙秘したら、真犯人が逮捕されることは永遠にないだろう。

「……けど、お前にミランダ警告を言う必要はない。お前は起訴だ。特例が出ているからな」

「は？ 罪の容認はしてないぞ？ 特例ってどういうことだ？」

基本、被疑者が罪を認めない限りは起訴とかは出来ないはずじゃ……特例ってなんだ？

「ジャック・オクパシー、お前には国から特例が出ていて、すぐに裁判所へ送って良いことに

なっているんだ」

と、捨て台詞を吐き、警察が取調室を後にすると、続々と人が取調室に入ってきた。そして、俺のことを掴み、また車へと乗らせる。

「ちよいちよい！ 展開早い！ のみこめないってば……」
もしかして、本当にこのまま裁判所へ向かうのか？

Section3 不審判決

「……よって、死刑を求刑します。」

はい？

この数行の間に何が起きたんですか？

まず、死刑っておかしくないか？

植魔平和友好条約の第五条で、全動植物に投票を行って、全会一致の時にだけ死刑処分が行われるはずだったろ。

「まさか……未来が変わっている？」

俺が過去を変えたから、植魔平和友好条約の中身が変わったっていうのか？

いや、でもあり得る。でも、もしこのまま死刑になったら、みきを救えない……真犯人を突き止められない。

「とりあえず、ジャックさんはこのまま刑務所へ向かってもらい、独房で死刑が来るその日ま

で、一人ぼっちでビクビク震えながら待っていただきます」
なんかこいつ、クッソむかつくな……

Section4 刑務作業

死刑囚は、死刑が執行されるその日まで、独房で過ごさなければならぬ。死刑囚は刑務作業をしないので、独房では何もすることがなく暇だ。大半の死刑囚は、自ら刑務作業を望み、刑務作業を行う。当然、俺も刑務作業を望み、今刑務作業をしている。

私語は禁止だが、この刑務作業が唯一、他の受刑者と触れ合える時間だ。

「おいー」

！ 急になんだ？

「この椅子作ったの誰だよー」

あいつは、この刑務所のボス的な存在の奴……って、あの椅子作ったの俺じゃん……もしかして俺の事呼んでる？

「は、はい……私ですが……何でしょう……？」

俺がボスの目の前に立つと、ボスが急に殴ってきた。

「痛っ!! ……急になんです……」

と、続きの言葉を言う前に、ほかの受刑者たちもこっちに走ってきて俺のことを殴ったり、

互いに殴り合ったりし始める。

暴動だ。刑務所じゃよくあることだ。

しかし、ここまで殴られ、蹴られ、踏み倒されると…………意識が…………飛びそ…………う…………

あれ？ ……………だんだん痛みを感じなくなつて…………

「大丈夫？ ジャック君…………？」

あれ？ ……これってまさか…………

「うなされてたから、つい起こしちゃったけど…………」

小学校の…………教室だ。また戻れたんだ。

Chapter4 undone

Section1 何度じゃ

…………やっぱり、今回も話の展開が早いな。

「ああ…………みきか。ごめんね…………」

学校で寝てたようだ。

「よかった…………で、校舎裏に女子を呼んでおいて、自分は教室で居眠りですか…………？」

多分、校舎裏に呼んだ、あの時に戻ってるんだ。

「い、ごめんみき！ もうちょっとだけ待ってて！」

俺は急いで教室を出た。

「まずは、生きる木に手紙を出して……前回みたいにならないように、パーティーの場所を変えよう……」

俺は、生きる木の家宛てに「この手紙をずっと持っていてください。肌身離さず。お願いします。」と書いた手紙を送った。

そして、かりんに電話をする。

「もしもし、かりん？　ちょっと急なんだけど、パーティー会場の変更できる？」

「うーん……事情は分かんないけど、まずはジャック君の家に行って、そのあと場所を変えよう？」

「うん、それでもいい。夜9時までに場所を変えられれば大丈夫だからさ」

「それなら、秘密基地でやろうか！　じゃあ、家で待ってるよ！」

俺は、美紀子のいる教室に戻った。

「で……？　話って？　まさか……二人きりだからって、変な事するんじゃない……よね……？」

また面倒くさいな。

「ちょっと、今日家に来れる？　皆いるんだけどね」

「お、私の誕生日パーティーかな？」

先に言われてしまった。まあいい。

「うん。そうだよ」

そして、俺は美紀子連れて家に帰った。

当初の予定から変わって、俺が家に連れて行った。

「ハッピーバースデー！ みき！」

みんなが一斉にクラッカーを鳴らして、誕生日パーティーが始まる。

「わあ！ ありがとう！」

そして、夜9時になったことを確認して、俺は言う。

「みき……秘密基地に行こう！」

「あれ……？ 2人きりで密室デートっていう事かな？ ジャック君……素直に言ってくれれば、私も付き合っただけよ？」

こいつの面倒臭さは、何回タイムリープしても治らなそうだな。

「はあ……とりあえず、見つかる前に早く行くよ！」

「見つ……かる？」

あ、言ってしまった。

「いや、気にしないで！」

皆を連れて、秘密基地に行く。

「すごい！　これがジャック君たちの秘密基地なんだ！」

秘密基地とは言ってるが、使われなくなったバスを勝手に使ってるだけだ。

「小学生にしては、すごい出来じゃん！」

なんかこいつ、結構上から物を言うな。

そして、パーティーをしていて、時間が過ぎた。

今の時間は……十二時だ。

なんとか過去を変えることが出来たんだ。

美紀子の母親はまだ来てない。

というより、秘密基地の場所は、森の奥の方にあるから、母親は「来られない」んだろう。

「もう十二時か……」

「じゃあ、私帰るね。夜遅いと怒られちゃうからさ……」

と、あいぱっどが言う。

「たしかに……遅いしね……」

と、かりんも言った。

「うん。もう夜遅いし……じゃあ、また明日学校で！」

俺がそういうと、あいぱっどとかりんが帰っていった。

「よっちとあっきーは帰らなくていいの？」

するとよっちが言う。

「帰っても大丈夫？」

「うん。俺とみきはここにいるよ」

俺がそう言うのと、よっちとあつきも帰っていった。

2人だけになってから、美紀子が俺に言う。

「ねえ……私は？」

事情を説明しようか？

だが、まだ事件の真相には至ってない。

ここは、それっぽいことを言っ、ここに残ってもらおう。

「ごめん！ 今日から、ここにいてほしいんだ。理由は言えないんだけど……」

さすがに不審か？

「ふーん……そう言っ、私に何かするのかな？ ……………まあ、それは冗談だけど、私はジ

ヤック君の事を信じてるから。何日でもいるよ」

美紀子の面倒くさが役に立ったのは初めてだ。

「ありがとう！」

いや、美紀子自身の事だから、俺が感謝するのはおかしいか？

とりあえず、明日の朝、学校に一番に行っ、先生との協力も得よう。

このまま秘密基地に置いていったら、見つかった時に大変だ。

「じゃあ、今日は寝よっか……」

「……うん」

このバスは使われてはいないが、当然バスだったから、ふかふかの座席がベッドとかの代わりになる。

俺は、扉を閉めて、ブランケットを持ってきた。

「あ、ジャック君使いなよ」

ブランケットは1枚しかないし、かなり小さい。

俺は何も考えずに言った。

「一緒に寝る？」

言ってから後悔した。

いや、後悔というよりは恥ずかしくて死にそうだ。

顔が真っ赤になって熱くなってきた。

「……うん。一緒に寝よ……？」

美紀子も顔を赤くしながら言い返した。

俺は、何も考えずに美紀子と体を寄せ合いながら寝た。

正確には、何も考えられなかった。

頭が真っ白だ。

顔は真っ赤だが。

秘密基地の扉が開く音が聞こえた。
かりんだ。

「おはよ、かりん」

「おはよう！ ジャッ……！？」

あつ、

隣には、小さくうずくまって寝ている美紀子がいる。

同じブランケットの中に。

「ああ……………その……………」

「……………何も見てない、何も見てない……………」

そう呟きながら、かりんは秘密基地を一回出た。

とりあえず、俺は一回ブランケットを外した。

「あ……………あの、か……………りん……………？ 戻ってきてくれると嬉しいんだけど……………」

俺は事情を説明した。

「なんだ、ブランケットが1枚しかなかったから一緒に寝てただけなのね！ 小学生にして、同じブランケットで肩を寄せ合いながら添い寝……………さすがにびっくりしたよ……………」

「誤解させてしまって申し訳ない……………」

昨日の夜の事は思い出さないようにしよう。

思い返すと、かなり恥ずかしい。

思い出す前に、かりんが、話を変えてくれた。

「で……この作戦って、いつ終わるの？」

この作戦の終わり……

終わりなんてないだろう。

一区切りをつけるというなら、美紀子と親を離す。

つまり、親を刑務所かどこかに送って、美紀子が誰かのもとに引き取られたところが区切りなんだろう。

「……みきの母親を、牢屋に入れるまで」

かりんは驚く。

それはそうだ。誕生日パーティーの事しか言っていないからな。

俺は、美紀子がまだ寝ていることを確認して、詳しく説明する。

「このままだと、みきは殺されるんだ。多分母親に」

「なんでそうなるの……？」

「信じられないだろうが、俺は未来から来た。大体25年後ぐらいの」

「……ジャックがそう言うなら。信じるよ」

SFぐらいじゃないとあり得ない話を信じてくれた。

「ちょうど明日、みきは家の倉庫の中で、無残な姿で発見される。みきは親から虐待を受けているから、警察は親を犯人として捜査していた」

『『していた』……？』

「みきの母親が、未来でうその証言をしたんだ。それで俺が犯人として捜査されて、追いか

られているんだ」

さすがに信じてないかな、と思ったが、意外と真剣に聞いてくれている。

「この事件は未解決で、俺は犯人がみきの母親だと思ってる。だから、みきを守るために秘密基地にみきを連れてきたんだ」

「ジャックはやっぱり優しいね」

「……それで、先生にこのことを相談しようと思う。もしかしたら、先生も虐待に気づいていられるかもしれない」

「わかった。じゃあ、私は今日学校を休んで、みきの事をここで見守ってるよ」

「本当！ それはすごいありがたい！」

俺は、かりんにみきを任せて、学校へと急いだ。

「そういうことか……」

俺は、蒼龍先生に事のすべてを説明した。

「確かに、美紀子には正体不明のあざがあって、虐待なんじゃないかと思って、俺も児童相談所に相談していたんだ」

予想通り、先生も虐待に気づいていた！ 話が進めやすい！

「何か事件が起きないと児童相談所は動かない。だが、その事件が殺人となると話は変わるな……よし、俺でよければなんでも協力しよう。口裏合わせでもなんでもやってやる。それが、生徒を守る職員の仕事だからな！」

「本当ですか！ ありがとうございます！」

これで、心強い仲間が増えた。
うちの小学校は私立校。教育委員会や児童相談所の協力は受けにくい。
だが、大人が一人いれば問題ない！

Section 4 一人目

俺は急いで、秘密基地に帰る。

先生から、俺たちは特別に、授業を休んでもいい特権をもらった。

「かりん！ 先生の協力得たよ！」

俺が扉を開けると、床には赤い水溜りが出来ていた。

「えっ」

秘密基地内の後方を見ると、赤色に染まった包丁を持った美紀子がいた。

美紀子の手前には、かりん……………華燐が倒れていた。

その服は……………体は……………赤黒く染まっていた。

「華燐……………」

俺が駆け寄ると、美紀子が泣き始める。

「……………みき……………これは一体……………」

「華燐ちゃんが……………お母さんのことを……………色々言うから……………本当にわざとじゃないの！」

信じて！」

美紀子が泣きながらすり寄る。

美紀子は、母親が自分に虐待をしていることに気づいていたんだろう。きっと苦しかっただろう。

それでも、母親の事を信じていたんだろう。

そんな美紀子の気持ちを踏みにじるなんて……

あの母親……許せない。

そして俺は、美紀子の母親に対して殺意が湧いてきた。

しかし、俺が美紀子の母親を殺したら、華燐と同じような道を辿ることになる。

華燐が死んだのは偶然だったのか？

それとも、誰かが死ぬのがこの世界の定理なのか？

どっちにせよ今は、華燐の死を無駄にすることは出来ない。

「……ごめんな気づけなくて……苦しかったんだよね……」

俺がそう言うと、美紀子は泣き崩れた。

「とりあえず、このことは誰にも言うな。華燐は席に座らせておいてやれ………」

美紀子は泣きながら、華燐を席に座らせた。
俺は美紀子の持っていた包丁を土に埋めた。

昨日の夜と同じで何も考えられない。
けど、昨日の夜とは全く違う感情だ。

Sections 広がる

あれから数日経った。

美紀子は秘密基地に泊まらせることで、母親の目を逃れている。

華燐の死は、風の噂程度だが、着々と広がっていた。

幸い、美紀子が犯人という事は誰も知らないようだ。

この噂が広がったのは校内だけで、まだ警察なども動いていない。

唐突に、

「ジャック君、放課後に少し職員室に来てくれないか？」
と蒼龍先生が、授業と授業の間に言ってきた。

……まさか勘付かれたのか？

そして放課後になり、俺は職員室へ向かった。

「ジャック君……美紀子の件なんだが、少し2人きりで話させてくれないか？」
「どんな話を……？」

俺は怖かった。

もし美紀子の罪がバレていたら。

そう思うと、美紀子をそうホイホイと渡せなくなってくる。

「別に大した話じゃない……」

蒼龍先生は、そう話しながらこっちに近づいてくる。

そして耳打ちするように言い加える。

「……華燐の件の事は、誰にも言うつもりはないから安心してくれ」

「!？」

勘付かれていた！ いや、見ていたのか!?

「だから、美紀子と2人きりで話させてくれ」

一瞬で分かった。

今、俺は脅されている。

「脅してて訳か……まあいいや。好きなだけ話せばいい」

こいつは、味方であり敵って訳か。

「ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えて好きなだけ話させてもらうよ……」

そう言う、蒼龍先生は職員室を後にする。

「……信じられる味方は……いないのか？」

そして、蒼龍先生は美紀子と教室で話し始めた。

俺は、秘密基地へと戻った。

「華燐……たたいま……」

俺はあの日以来、秘密基地に戻ってきたら、華燐に挨拶をするようになった。

俺が挨拶をして何かが変わるわけじゃない。

だが、美紀子をしっかり見ていなくなった俺の責任でもあるから、小さな償いとして挨拶していい。

蒼龍先生は、話は30分ぐらいで終わると言っていた。

しかし、既に2時間経っている。

俺は、また学校に戻ることにした。

職員室には蒼龍先生がいた。

「蒼龍先生！ 美紀子は？」

「ああ、さっき話を終わらせて、俺は帰ってきたか？」

っていう事は、すれ違ったのか？

俺は一応、教室へ行くことにした。

「ガラガラ……」

教室の扉を開けたが、そこに人の姿はなかった。

「よかった……すれ違っただけか……ん？」

黒板に目を向けると、白いチョークで文字が書かれていた。

「何々……『後ろを見ろ』？」

低クオリティーのホラーゲームレベルの文章が書かれていた。

「後ろに何があるって………!!？」

後ろには、体中に刺され傷のある美紀子がぐったりしていた。

美紀子の体からは赤黒い液体が流れ出ていた。

自分の実力不足だ。

華燐の死の噂が蒼龍に広まるのを抑えられていれば……

華燐の死の噂が広がるのと同じように、美紀子の体からは赤黒い液体が、床に広がっていった。

もう何も……誰にも……止めることは出来ないんだろう。

Section6 抵抗

「わかったか？ 小学生がどう足掻こうが無駄なんだよ」

教室の扉の前には蒼龍が立っていた。

「お前が……美紀子を殺したのか……」

蒼龍は答えない。

「答えろよ!!」

「もう良いだろ? 終わった事なんだから。それより、この後少しドライブに行かないか?」
こいつは今の状況を何一つとして分かってない。

「ふざけてるのか? 何が『終わった事』だよ……、何が『ドライブに行かないか』だよ……」

俺の怒りは沸点を超えて、すべて蒸発していったかのように静かだ。

「ああ………もう分かったよ……」

美紀子が華燐を殺したことを公表されることを恐れて、俺は蒼龍の言った通りにすることにした。

俺は蒼龍の車に乗り、ドライブに出た。

「それにしても、どうしてドライブに……?」

蒼龍は不敵な笑みを浮かべて言う。

「そんなの簡単だろう? 理由は一つさ」

「理由って……」

笑顔でこっちを見て言う。

「……うちの生徒が人を殺したっていう話が外に出たら、うちの学校の評判が下がるだろう? 関係者を消せば、うちの学校の評判は保たれるんだ」

……こいつは、学校の評判の為に美紀子を殺したんだ。

つまり、全部分かってたんだ。

「でもドライブで俺を連れていく理由って………っ！」
全てを理解した。

俺も関係しているっていう事も当然知っているんだ。

こいつは俺を殺すんだ。

「分かったようだね……」

まずい、今すぐ逃げるしかない！

けど、シートベルトが硬くて外せない。

扉も開かない。

「え……」

「どうしたジャック？ 確かに俺は言ったよな？ 『小学生がどう足掻こうが無駄』って」

「シートベルトに何か細工をしたのかっ！」

「もう、どうだって良いだろ？ すぐに終わるんだから」

確か、この車には自動走行機能があったような……

「じゃ、俺は行くぜ。あとの事は、俺が全部もみ消しておくから安心して眠りな」

蒼龍は、走っている車から飛び出る。

そのまま車は、湖に向かって走り続ける。

俺は蒼龍に向かって叫ぶ。

「俺は……俺は、何度でもお前を追うぞ！」

「……何を言っているのかは分からないが、そんな心配はいらないぞ！」

多分何言っても聞かないだろう。

でも、今までと同じなら、死にそうになったらタイムリープして、元に戻るだろう。
だが、分からない。戻れるという確証はない。

そして、俺と車は湖へと沈んでいく。

「はあ……呼吸が………苦し……」
意識が……遠のいて……

Chapter5 skip

Section1 The corrected world

………

……あれ………?

………ここは………?

「嘘………!!? ジャックさんが起きました!」

この人は………?

「あ………ここは? そしてあなたは………?」

「私は佐藤千夜、ここは病院です。ジャックさん、自分のフルネームと誕生日を言えますか?」

千夜って……

「俺は、オクパシー・ジャック。7月27日生まれです」

「よかった……記憶は失ってないようですね。という事は、私の事覚えてます？」

「ちよって、よ……よっち？」

「……ジャック君！ 久しぶり！」

大人になったよっち……いや、千夜だ。

タイムリープして、今までとは大きく違った未来に來たのか？

「俺はなんで病院にいるんだ？」

「お、病院ってすぐに分かったね、さすがジャック君！」

そして、千夜が少し悲しそうな顔をして話始める。

「ジャック君はね、事件に巻き込まれたの。あなたの乗ってた車ごと湖に沈められるっていうね」

もしかして、俺はタイムリープしたんじゃないかって、あの時からずっと寝たきりだったのか？

「俺ってもしかして……寝たきりだった……？」

「そういう事……」

タイムリープはしてなかったっぽい。が、別に関係ない。

「で、その犯人が誰なのか分かってないの。証拠が全くないからね……」

俺は知っている。俺が被害者なんだから。

「で……ジャック君、何か覚えてたりしない……？」

俺は「犯人は蒼龍だ」と言おうとする。

しかし、口が動かない。

いや、口だけじゃない。体全体が動かない。体が痺れているように動けない。

誰が、俺に何かをしたのか？

「……………やっぱり言いにくいよね……。ごめんね！ 変な事聞いちゃって！ じゃ、私行くね！」

「言いにくい」んじゃない。言えないんだ。

「あ、そうだ。誰からかは分からないけど、ジャック君宛てに封筒が届いてたよ。はい！」

そう言っただけで千沙が取り出したのは、茶色の一般的な封筒だ。

中には手紙らしきものがあるように見える。

「じゃ、ここに置いておくから。また何かあったら呼んでね！」

そう言々と千夜は、病室から逃げるように出ていった。

30分ぐらいが経っただろうか。体が動くようになってきた。

俺は、千夜が置いておいてくれた封筒を開けた。

中には予想通り手紙が入っていた。

お前の言動一つで、友人を失うことになる。気をつける。

お前が何も言わなければ、この世界は平和のままで。

だが、お前が事件の事や、俺の事について人に話せば……
この先は言わなくても分るよな……？
気をつけて生活することだ。

一発で分かる。

この文字、そして書いてある内容……

この手紙も、俺の体を動かしたのは、蒼龍だ。

千夜はもちろん、警察も犯人が誰か知らないんだろう。

俺は、人間として、誰か犯人かを言わなければならない。

だが、ヒトとして、生きるためには何も言わないのが正解だ。

「俺は、一体どうすれば……」

何もわからなかった。

けど、一つ思い出したことがある。

「生きる木なら……！」

Section2 行政機関直属特務機関

俺は病院を抜け出し走る。

植物科がある（であろう）場所へと。

「はあ……ここだよな……」

どうやら、未来は大きく変わっていたらしい。

植物科がある場所には「行政機関直属特務機関 植物科」と書かれた、石の看板がある。

俺は中へと入っていく。

中はオフィスのような見た目になっていて、目の前には「インフォメーションデスク」と書かれたデスクがある。

俺はインフォメーションデスクの人に話しかける。

「あの！ 生きる木さんっていますか？」

未来が変わっていないければ、生きる木もいるはずだ。

「ええ。いらっしやいますとは思いますが……アポはとりましたか？」

聞いたことがある。アポイントメント……面会や会合の約束とかだったっけ？

「いや！ 急用なんだ！ どこにいるか教えてくれ！」

「申し訳ございませんが、アポなしでの『所長』との面会はお断りしておりますので……」
所長？ まさか、生きる木が？

まあ、所長ならアポは必要だな……

「……そ、そうだ！ 俺とあいつは友人だ！」

もしかしたら、手紙の事を使えば……

「……はあ、わかりました。今、所長に聞いてみます……」
助かった。

「ええ、はい。所長と面会の希望をされている方が……ええ、わかりました。失礼します」

インフォメーションデスクの人が受話器を置く。

「良かったですね。今なら暇なようですよ。所長室は最上階ですよ」

「あ、ありがとうございます……」

あれ？ この建物は何階建てだっけ……？

エレベーターが最上階に着くまで一分半。

高すぎでしょ……

「最上階です。ドアが開きます」

エレベーターの扉が開く。

その奥には、また扉がある。

俺はその扉を開ける。

そこには、小さなデスクと一本の木が生えていた。

……いいや違う。そこにいるのは生きる木だ。
「呼んだ？」

Section3 Re:植物科

「木〜！ 会いたかったよ！」

「えっと……君は？」

「そうだった。未来は変わっているんだ。」

「ああ、ごめんなさい……俺はジャックと言います」

「……君か、ジャック・オクパシーっていうのは」

「なぜ俺の名前を知っているんだ？」

「それは、君が手紙を出したからさ」

「心が読めるのか!？」

「これは確か、戦術（アビリティ）の――」

「――第四の戦術、思考読込（Think loader）だよ」

「戦術の名前が変わっているな。確か「読心（どくしん）」って名前だったはず。」

「ってことは、俺の事を知っているの？」

「植物科で、手紙を調査したんだが……君は『タイムリープ』しているんだろ？」

あんま会話噛み合って無くない？

「は、はい。二回ぐらいタイムリープしてます」

「うん。調査結果通りだ！一回目は石川の家で、二回目は新幹線だよね？」
なぜそこまで……

「ひまわりさんは覚えてる？」

「うん」

「彼に君からの手紙を分析してもらったんだ」

Section4 変わった過去

「ってことで、この手紙を分析してくれる？」

「まあ、いいよ」

ひまわりさんは、生きる木から手紙をもらい、謎の機械へと入れた。

「その機会は？」

ひまわりさんが機械を操作しながら答える。

「物体分析機って言うってねー（ポチポチ）、物体の成分を調べたり（ピピッ）、いつ作られたと
かも分る優れものだよ（ピーピー）」

「へえー、すごそう」

「二十億円したからね……」

「その資金は一体どこから……」

「お、早速分析結果出たよ！」

生きる木が機械についているモニターを覗き込む。

「えーっと……なんて書いてあるの？」

「んーっとね……あれ？」

「どうしたの？」

「この手紙……何かがおかしい……」

「えっ」

ひまわりさんは研究室に行って、パソコンを操作し始める。

「いやまさか……ごく一般的な手紙が時を超えるなんて……ありえない……」

「時を超える？」

「この手紙は時空をさまよっているようだ。成分に時流紛がついている……」

「じりゅーぶん？」

「まだ研究中なんだけど、すごい速さで時間が進んだり、逆に時間が戻ったりすると、代償っていうほどのものじゃないけど、時流紛っていう粉が物体にくっつくんだよ。目に見えないんだけどね」

「すなわち、その時流紛っていうのが、その手紙に着いているから、手紙が時間を超えたんじゃないのかってこと？」

「粉の量から見て『手紙が時を超えた』んじゃないくて『時を超えた人が手紙を書いた』んじゃない

ないかな？」

「へえ……」

「生きる木君、この手紙をちょっと預かってもいいかな？」

「うん。いいよ」

「もしかしたら、この世界を救う手助けになるかもしれないんだ」

それから二か月ぐらいが経った。

生きる木がいつものように起きて、研究室に向かう。

「はあ……おはよう」

「生きる木！ ついにこの手紙の正体が分かったぞ！」

そう言いながらひまわりたんが駆け寄ってくる。

「え？ ああ、おお！ で、誰が出したの？」

「ジャック・オクパシー。現魔王の息子で、ずっと寝たきりになっている」

「その人がこの手紙を？」

「正確には、ジャック君に手紙を出すように、君が指示したんだ」

「え？」

ひまわりたんが、生きる木に全てを説明した。

タイムリープ前の世界での出来事。

ジャックと生きる木の関係。

ジャックが寝たきりになった理由。

「……っていう事があったんだよ」

「どうしてそこまで分かったのかが気になるよ……」

「時流紛は、いわばQZAなんだよ。それまでの時代のデータが書き込まれているんだよ」

「……で、僕はどうすれば？」

ひまわりたんが研究室から出ながら言った。

「木がやりたいようにしなよ」

「……………僕のやりたいこと……………」

そして、生きる木は「ジャックがどうなってもいいのか……………？」と魔王を脅して、講和条約を結ばせた。

その条文の中に新しく「植物科は、行政機関直属特務機関として、政府と協力しながら、この世界の平和を守る機関とする」が追加された。

「これで、ジャックが起きたら一緒に過去を変えられる！」

「生きる木？　僕は少し、タイムリープの研究をするよ。上手くいけば、過去と未来を行き来できるようになって、ジャック君が起きたときに、何度でも過去を変えられる！」

Section5 変わらない未来

「つまり、俺がタイムリープしたという事も知ってるし、事件の事も知ってるってこと？」

「まあ、そういうことさ。君も大変だね〜……変わる前の過去の僕も大変だったっぽいけど……」

「で……ジャック君……君は何がしたいの？」

「俺は、美紀子を………助けたい！」

「そうだろうと思ったよ！ Eey ひまわりたん！」

「Eey 呼んだ？」

「『アレ』を見せてやれ！」

「Okay」

するとひまわりたんは、大きな機械を持ってきた。

「これは、タイムリープマシン ZS系さー！」

「タイムリープマシン ZS系？」

生きる木がフリップをめくりながら説明する。

「これは、タイムリープを人為的に起こせる機械さー！」

「つまり、それがあれば毎度死にそうな目に合わずに、過去に戻るってこと？」

「そういう事さ！ さあ、一緒に過去に行こう！ 僕も手伝うよ！」

そう言いながら、俺を連れて生きる木が機械に入る。

「……あれ？ 生きる木と俺が入ったら……過去が大きく変わっちゃうんじゃない？」

もし、生きる木が植物科に所属できなかったら、魔王というかお父さんは、ずっと世界を支配することになるんじゃないのかな？

「安心しろジャック！ 小学5年生の時に戻るけど、僕が植物科に所属したのは高校2年生だからさ！」

よかった……

と、そんな事を考えていると昔の学校に帰ってきた

「おお、本当に戻ってきた……」

「植物科………じゃなくて、行政機関直属特務機関の植物科の技術力を舐めちゃいけないよー」

Chapter6 エンディング

Section1 ハンターハンター

計画を練って、美紀子達を救わなきゃいけない。

「生きる木？ なんか、世界を平和にする道具とかないの？」

「僕は猫型ロボットじゃないよ……まあでも、人の関係を仲良くさせる道具ならあるよ」

「じゃあ、それを使って皆を仲良くさせよう！」

まず、美紀子とお母さんを仲良くさせるか。

そして、美紀子の家へと向かう。

「生きる木、あの家から親子が出てくるんだけど、出てきた瞬間にその道具を使って、仲良く

させて！……ってか、その道具ってどういう仕組みなの？」

「この道具は『仲よっしー』って言う、銃の形をした道具なんだけど、銃口から光線が出るんだよ」

「光線って……危ないじゃん！」

「いや、光線って言っても、思考や記憶を操作する光線だし、痛くも痒くもないどころか、気づかないから大丈夫」

「ほえー……」

そんな話をしている間に、家から二人が出てくる。

「生きる木！ 今だよ！」

「発射!!」

「仲よっしー」から光線が出て、二人に当たる。

すると、離れて顔も合わせずに家から出てきた二人が、途端に手を繋いで笑顔になった。

「おお……これが『仲よっしー』の力か……」

「文明の利器ってやつだよ！」

これで、平和な親子になっただろう。

美紀子のお母さんが虐待をしたから、俺が美紀子を秘密基地に連れて行って、美紀子が華燐を殺した。つまり、もう誰も死なないはず。

「ジャック……何回もタイムリープして大変だったね。お疲れ様！」

「じゃあ、未来に戻ってニュースでも見てみようか！」

「うん！」

そして「タイムリープマシン ZS系」に乗って、未来に戻る。

はっ！ 寝てた……？

「こ、ここは？」

「未来に戻ってきたよ！」

そうか、こんな感じで戻ってくるのか……

「えーっと……『小学6年生女兒殺人事件』っと……」

俺は、スマホで事件の事を調べる。

「！」

「ん？ どうしたのジャック？」

ジャックの目には、入ってくるはずのないものが入ってきた。

「どうして……事件のニュースが載ってるんだ!？」

「え……？ 美紀子の親子は仲良しになって、事件も起きないはずじゃ……」

ひまわりさんが、待っていたかのように、こっちに来た。

「ジャック君……もしかしたら、誰かが時空を『歪ませている』……いや、『操っている』のかもしれない……」

時空を操る？ もう、物語のエンディングに差し掛かったのかと思ったのに、まだ続くのか？

「でも、そんな事を出来る人間がいるの？」

生きる木が答える。

「そんな奴いない。普通の人間は出来ないはずだ」

ひまわりたんも答える。

「そもそも、時空に関する研究とかは、植物科しかしていない。つまり、誰も時空を操ることは出来ないんだ……」

「つまり……自然に時空が歪んだってこと？」

俺は、全然話が理解できない。

「ジャック君、何か心当たりは——」

「——ある」

なんで今まで思い出せなかったんだ。

今思えば、不思議な事だ。

「ジャック君、心当たりがあるのか？ それは一体……？」

『『あいばっど』……『時板愛美』だ』

「愛美さんって……たしか、最初のタイムリープの時に………はっ！」

生きる木も気が付いたようだ。

時板愛美には、ずっと違和感を覚えていた。

二回目のタイムリープの時、秘密基地で「じゃあ、私帰るね」と言ってから、一度も見えない。

三回目のタイムリープの時に至っては、一度も見えていない。

普通に過去に戻ったただけなのに、なぜいなかったのか？

その答えは、一つだろう。

「あいつは、人間じゃない」

「ジャック！ 過去に戻るよ！」

「うん！」

過去に行って会える確証はない。だが、行く価値はある。

そして、4度目のタイムリープをする。

Chapter7 終わらない

Section1 気が付かれた？

はっ！ えっと、この感じはタイムリープしたんだよね……4回もやれば、そろそろ感覚がつかめそうだ。

「えっと、今はどのフェーズだろう？」

多分、これから教室に戻って、美紀子をパーティーに誘うフェーズだろう。

俺は、まず華燐に電話をする。パーティーの場所変更についてだ。

3回目のタイムリープの通りにいけば、秘密基地にまで行ける。

そして、美紀子が華燐を手にかける前に止めなければならぬ。

「とりあえず、木は愛美を探してきて。もし、本当に時空を操っているなら、『俺らが違和感に気付いている』事に気付いているだろう。つまり、普通の生活を送っているような素振りを見せるはず……」

「うん。じゃあ、ジャックは頑張っただけ。絶対に華燐さんを死なせちゃだめだよ」
そう。つまり、秘密基地に泊まった次の日に、俺がいればよかった。俺が学校に助けを求めたから。蒼龍も敵だ。あいつに助けは求められない。

＝翌日の朝、秘密基地にて＝

「おはよ、華燐」

「おはよう！ ジャック……!?」

2回目だが、やっぱり美紀子と一緒に寝るのは恥ずかしいし、それを見られたときに説明するのが面倒くさい。

「あー……、ブランケット1枚しかないから一緒に寝たことで納得してくれる？」

「ふええ………そういう関係じゃないんだね………?」

「うん。誤解させてしまって申し訳ない」

っていうか、華燐が来る前に、ブランケットから出れば良かったのか。

「で……この作戦って、いつ終わるの？」

この作戦の終わり……それはもう「みきの母親を、牢屋に入れるまで」じゃない。結局の事を言くと、誰が真犯人かなんてわからない。

「みきが死なないように、俺が守り続ける。つまり……終わりはないんだろうな……」
俺は思った言葉をそのまま言った。

「えっ？ みき、死ぬの？」

「まあ、色々あって殺されるかもしれないんだ」

「小学生で命を狙われるって……？ バカみたい……」

まあ、命を狙われてる小学生なんて前代未聞だろうな。

「でも、命狙われてるんだったら、先生に相談したらどうなの？」

あいつは信頼できない。

「先生も少し信頼できないんだよ……」

「へえ……」

と、俺と華燐が話していると、美紀子が起きた。

「ん………あ、ジャック君、かりんちゃん……おはよう……」

「あ、みき！ どうだった？ ジャック君との添い寝の気分は？」

「うん！ 幸せな気分だったよ！」

おいおい……恥ずかしくなって来るだろ……

「と、とりあえず朝ごはん食べよっか！」

この秘密基地にはキッチンも（勝手に）完備されている。

「お！ ジャック君の朝ごはん！ 楽しみ〜！ かりんちゃんも一緒に食べようよ！」

「じゃあ、お言葉に甘えさせていただきますかっ！」

なんか、シェアハウスに住んだみたいで楽しいな。

「みなさん、今日の朝ごはんはどうしますか？ と、言っても具材は少ないけど……」

食料には限界がある。だが、少なくとも3日ぐらいいは、1日3食提供できるだろう。

「私パン派だから、トーストでお願いまーす！」

「私もみきと同じくトーストで！」

「うん！　じゃあ焼きますか……」

俺は、幸いにも美味しいトーストの焼き方を知っている。

まず、食パンに縦3本、横3本の切れ込みを入れる。深さはパンの3分の1ぐらいがちょうどいい。

そしたら、霧吹きとかで、パンの両面に水をまんべんなく吹きかける。これで、パンに水分が入ってももちもちになる。

トースターに入れて、こんがりと茶色い焦げ目が付くまで焼く。

そしたら、ファットスプレッドを塗る。まあ、バターとかマーガリンの事だ。これをたつぷりと塗る。パンの切れ込みにバターの味が染みこんでいく。

Section2 お別れっ。

「さーさー、もう2枚も出来上がりしましたよ！　美味しいトースト……」

「……いらない。………何もいらない」

え？　そんな……頑張って作ってるんだけど………っていうより声の様子がおかしい。

「んー？　どうしたのー………っ！」

そこには、赤黒い血に染まったカッターナイフを持った華燐がいた。

「えっ」

「……ははっ……はははっ!」

華燐が狂ったように笑い始める。

「そうよ……全部みが悪いのよ! 私的大好きな人を奪おうとしたんだから! ……何が

『幸せな気分だったよ』なのよ! ふざけるんじゃないわよ……私のジャック君を……」

俺は頭が真っ白になる。自我をなくし、手に持っていた包丁で華燐を刺した。

何度も何度も。華燐にまたがって、何度も何度も包丁を振り下ろす。

「ふざけんなよ……てめえ一人の幸せで美紀子を殺してんじゃねえよ!!」

自分が何をしているか気が付いた時には既に何もかも手遅れだった。

俺は、変わり果てた姿になった華燐の上に乗っかっていた。

「……えっ、俺は……何を……」

自分でも何が起きたのか、何をしたのかが分からない。冷静になれない。

けど、1つだけ頭に浮かんだ事がある。

「今すぐここから逃げなきゃ」

ただそれしか頭になかった。

「はあ、はあ……」

俺は、周りも見えずに、ただただ走り続けた。気が付けば、見たことのない森の中に入っていた。

「こ、ここは……」

俺はスマホを取り出す。

「位置情報は……GPSが届かないか……でも、電波は届いてる。通知がポンポン来て……」
その中にニュースアプリの通知が入っていた。

廃車のバスの中で小学6年生の女児2人の遺体発見

「嘘っ……」

スマホの時計を見る限り、俺は数時間ずっと走り続けていた。服が黒いから、血の色は見られず、特に不振にも思われなかっただろう。けど、この短時間で遺体が見つかるのはおかしい。けど、答えは一つだ。

「蒼龍……」

前も、華憐が殺されたことを何故か知っていた。今回も同じように、2人が殺されたことを知っているのだろう。

だがどうして？ 秘密基地があるのは相当山奥だ。そう簡単には見つからないはずだ。
「いや、今は原因を探している暇はない」

まずは、ここで時間を過ごそう。

それにしても、この森には、木が鬱蒼と生い茂っている。かなり神秘的な光景だ。少し歩いていようか。森の出口もまだ見当たらないし。

どれだけの時間が経ったのだろう。空は少しずつ暗くなっている。

「はあ……」

俺は、今になって華燐達の事を考える。

涙が流れてくる。

どうしてあんなことしてしまったのだろうか。

涙が頬を伝い、何度も地面に落ちる。

俺は、一体何に反応してあんな行動を取ったのか……………

そんなことを考えていると突然、後ろから声がした。

「なぜ逃げるの？」

「これは運命。ジャック君の歩むべき運命なんだよ」

後ろには、美紀子と華燐がいた。

「み、みき?! それにかりんも?! ど、どうして?!」

多分俺は、幻覚でも見ているのだろう。

「何で私の事助けてくれなかったの? 私、信じてたのに」

美紀子言う。

「ち、違う! まさか、華燐が美紀子に手をかけるなんて——」

「——もういいんだよ」

え

「それより、なんでここにいるの……？ 付いてきたって事？」

俺は頭の回転が追いつかなかった。相手のペースに飲まれて、相手が会話の主導権を握った
ら、俺は殺されるかもしれないと思ったからだ。だから、何か質問を投げる。

「別についてきたわけじゃないよ」

「ジャック君がおかしくなってるだけだよ」

そうだよ。俺がおかしくなってる。それだけなんだ。

俺の体は、立っていられない程に震える。

「とりあえず、ジャック君にも死んでもらおうか」

「ジャック君だけずるいよ」

呼吸が乱れる。

俺は、森に來た時と同じように走る。

前も見ずに、ただただ走り続ける。

あの場所にいたくない。いたら殺されてしまう。

Section4 時を越えた逃亡

気が付くと、目の前はいつもの町だった。

「あれ、なんでここに出てきたの……？」

後ろを振り向くと、誰も来てない。安心だ。

とりあえず、スマホニュースを見よう。

指名手配中のオクパシー・ジャック、報奨金が2倍に上がる

何っ!?

俺、いつの間に指名手配されて………!!?

ニュースの配信日時を見ると、俺がタイムリープで未来に戻ってきた年と同じだ。

「つまり……」

走ってきただけでタイムリープしたって事………か？

そんな考えをしていると、後ろから肩を叩かれる。

「オクパシー・ジャック君だよな？ 殺人の容疑で令状が出てる。逮捕します」

やられた！ もし街に出なかったら……タイムリープしてなかったら……

Section5 繰り返される過去っ

この光景は既に一度見た。前回同様、何故かそのまま裁判所へ向かった。

「よって……被告人『オクパシー・ジャック』を無罪とする」

だが、前回とは違って、俺は無罪になった。前とは違って、警察の捜査では2人も殺した事になっているのに。

確かに、美紀子を殺したのは、俺みたいなものだ。

その罪は償わなきゃいけない。それは分かっている。けど、なぜ無罪になったんだ？

俺はそのまま裁判所から出された。

どうしよう。全然訳が分からない。色々な出来事が一度に起きすぎた。

………とりあえず、あの森に戻ろうか。

………幻覚だかなんだか分からないけど、美紀子と華燐に謝らなきゃいけない。
行こう。あの森へ。

Section6 最期の約束 - 審判と契約

記憶の限りで、歩いていたら、森についた。

俺は森を歩く。やはり、この神秘的な森は癒される。

すると、突然後ろから声がした。

「へえ、無罪になったんだ。私たちを殺したのに」

「まあ、許してあげなよ、かりんちゃん。まだ罪を償うのには時間があるし。ちゃんとジャック君には罪を償ってもらうつもりだし」

後ろを振り向くと、美紀子と華燐がいた。幻覚だと分かっているけど怖い。もしかしたら幻覚じゃないんじゃないのかって。

さらに、美紀子と華燐の後ろから人が現れた。

「審判と契約の時よ」

愛美だ。過去で生きる木に探させた、黒幕と怪しんでいる人だ。きっと愛美も幻覚だ。

「あなたを先の裁判で無罪にした理由はたった一つ。世界からの審判を受けて、罪を償ってもらうため」

さっき審判を受けたばかりなのに、また審判を受けるのか？

「ジャック君、あなたはやってはいけないことをした。あなたは罪の償いとして、今すぐここで死になさい。これが世界の審判なの」

それって――

「――彼女たちと同じように死になさい。あなたは……………そうね、ここで自殺するのがベストなんじゃないのかしら？」

「……何を言ってるんだ?!」

愛美が訳の分からないことを言っている。世界の審判？ 愛美は一体何者なんだ？ 違う。これは幻覚だ。俺の作り上げた世界なんだ。

「自殺は出来ないって言うの？ 他人に殺してもらおうなんて思ってるの？ あなたは、色々

な人に迷惑をかけた。そのうえ、まだ他人に迷惑をかけるっていうの？」
体は拒絶を示しているのか、これまでにないほどに震えている。

呼吸も乱れている。

今度こそ、殺される。

もう逃げられない。足が麻痺したように動かない。

「……けど、あなたにも選択肢はあるわ」

「選……択肢？」

「罪の償いとして、今すぐここで死ぬか……もう一度過去に戻って、彼女らを救う」

今、「過去に戻る」って……？

「これは、世界とあなた……いや、私とあなたの契約よ」

これって……

「審判と……」

「そう。審判と契約。植物科とかなんとかで、神話は少し聞いたはずよね？ その中に書いて

あったはずよ」

ああ、確かに聞いた。事件相談所で生きる木が話してくれた。

「……俺は……過去を変えたい」

「一応聞くけど……覚悟はあるの？」

覚悟。自分の身などどうなっても構わない覚悟がある。

「あなたの諦めない精神が、あなたを過去に戻らせた。そこで何度も、色々な事をやった。それは称賛に値するわ。けれど、全ては悪い方向に変わっている。今もまさにそうよ。あなたは

死ぬ運命なんだから……また過去に行っても何もできないかもしれない。無駄かもしれない。むしろ、悪化させてしまうかもしれない。……次、過去に戻るのには、この一度限り。過去を変えられなかったら、罪の償いとして、今度こそ死んでもらうわ。……ジャック君。あなたに……それ程の覚悟はある？」

「……もう、誰も失いたくない」

愛美は「ふっ」と笑う。

「……………うん。分かった。ジャック君の芯は何も変わってないみたいね」

これは……まさか……助かった？

「ちゃんと過去を変えて、美紀子たちを救ってね。世界との……………いいえ。私との、最期の約束よ」

愛美がそう言うのと3人は、俺が瞬きをした瞬間に消えた。

あれは幻覚だということを忘れてしまうくらいの威圧だった。本当に殺されるんじゃないかと焦った。

これで、とりあえず過去には戻れるだろう。けど……謎が多すぎる。

解決できるか分からない。

でも、取り交わした約束は守る。人間として。

「美紀子……お前に絶対……未来の世界を見せてやる……！」

Section1 基礎から

俺は森を出た。スマホを見ると、日付は過去になっていた。

「……過去に戻れた……？」

つまり、やり直せるという事。ちゃんと、契約……いや、約束通り、美紀子を助けなきゃいけない。

まず、どの時間帯にタイムリープしたのかを調べなきゃいけない……

「ジャック君？ どこ見てるの？ 早く行こうよ！」

ん？ 美紀子の声？

空を見る限り今は夜。隣を見ると、美紀子だけじゃなく、パーティーに招待したみんながいる。

夜かつ、みんながいるという事は、これから秘密基地に行くとそろそろなんだろう。

「あ、ごめんごめん！ ちょっと考え事してただけ！ さ、行こっか！」

そして、美紀子たちと共に秘密基地に行く。

「すごい！ これがジャック君たちの秘密基地なんだ！」

そういえば、秘密基地って誰と作ったんだっけ？ 何年も過ごしたから、ちょっと過去の記憶が薄れてきた。

「小学生にしては、すごい出来じゃん！」

そして、秘密基地内でパーティーを始める。

上手く過去を変えないといけない。まずは、やるべき事をリストアップしよう。
とりあえず、パーティーをしている最中ではあるけど、スマホのメモアプリで、
原因と解決方法を書こう。

かりんがみきの母親の事を悪く言った

|| かりんを監視して、かりんの母親の悪いことを言わせない

かりんの俺への……

なんか、自分で「俺への愛」とかって書くの恥ずかしいな……
ちよっと書き方を変えるか……

かりんがみきの母親の事を悪く言った

|| かりんを監視して、かりんの母親の悪いことを言わせない

かりんの俺への欲望が強すぎた

「みきの俺に対する好意アプローチをやめさせる

こんな感じかな？

とりあえず、美紀子と華燐から、一瞬も目を離しちゃいけないな……

ってか、今更考えたら、華燐がヤンデレで、美紀子もヤバイ奴で……その三角関係に巻き込まれて……

俺って、自分でいうのもあれだけど……相当不憫な人じゃない？

パーティーは無事に成功した。

「じゃあ、私帰るね〜」

と、愛美が言う。

俺があの時見ていたのは幻覚だ。きっと幻覚だ。本人じゃない。絶対に本人じゃない。今ここに愛美がいる。だから、愛美は普通の人だ。

決して、愛美は俺の事を殺したりはしない。

「……ん？ ジャック君……大丈夫？」

顔に出てたか……?! 愛美に言われると、かなり焦ってしまう。

「いや………何でもない！ また明日ね！」

「じゃあ、私も帰らせてもらうね！ また明日！」

と、華燐と愛美が一緒に帰っていく。

「よっちとあつきーは帰らなくていいの？」

「帰っても大丈夫？」

と、よっちが言う。

「うん。俺とみきはここにいますよ」

俺がそういうと、2人は帰っていった。

「……ねえ……私は？」

前と同じように、ここでは事情は言えない。

ここで美紀子に事情を言うのは、相当危険な行為だ。

もしかしたら、俺と華燐、2人ともに母親の事を悪く言われたから、華燐の事を殺したのかもしれない。

「まあ……かくかくしかじかの感じで分かってほしいんだけど……今日から数日間はこちらにいて欲しいんだ」

「ふーん……理由も言わずに可愛い少女を監禁ねえ……？　まあ、それは冗談だけど、私はジャック君の事を信じているから。何日でもいいよ」

——「何で私の事助けてくれなかったの？　私、信じてたのに」

記憶が蘇る。あれは幻覚なんだ………それなのになんで、こんなにも怖い？

何度も自分自身に「妙に現実的な幻覚だったんだ」と言い聞かせる。

真偽は分からないけど、今はそう思うしかない。

「……ジャ……ジャック君？　だ、大丈夫？」

「う、うん。今日はちよつと疲れたよ……もう寝よつか」

「うん！　今日は楽しかったよ。ありがと！」

俺は秘密基地の扉を閉める。

「みきはこのブランケット使って寝なよ。俺は奥の方で寝るから」

「あ、それなら……」

美紀子が何かを鞆から取り出す。

「この服使いなよ！」

「おお……ふわふわなコート……」

「リバーシブルポアブルゾンだけどね」

リバー……今、なんて？

「まあ、その……リバースブルポアブルゾン借りて良い？」

「良いよ！　リバーシブルポアブルゾンだけどね」

俺は美紀子がくれた、リバー……服を持ってキッチンへ向かう。

「おやすみージャック君」

「うん。おやすみ」

ってか冷静になって考える。

「なんで前のタイムリープの時、服持ってたのに『一緒に寝よ』とか言い出したんだよ……」
少し声が漏れる。

「あつ、やべっ……」

美紀子の方を見るが……大丈夫。あっち向いて寝てる。

今の聞かれてたら、色々と面倒くさいことになるところだった……

Section2 111から始まる

朝が来た。朝という事は、もうすぐ華燐が来るはずだ。

ちようど秘密基地の扉が開く。

華燐だ。

「おはよ、かりん」

「おはよう！ ジャック君！ 本当に秘密基地で寝たんだね……」

今回、美紀子とは一緒に寝てないから、なんとかなりそうだ。

「みきが起きてないうちに聞いておきたいんだけどさ……この作戦って、いつ終わるの？」

俺は即答で答える。

「お前らが死ぬまで、一生続ける」

「ええと……よくわかんないけど……それじゃあ、ずっとみきをここに閉じ込めるっていうの？」

「いや、別にそこまでじゃないけど……」

もしここで華燐に「美紀子の母親が、美紀子に虐待してる」なんて言ったら、華燐は美紀子の母親の事を色々と言うだろう。そうなると、美紀子が華燐を殺してしまう。

「じ、実は……みきは何者かに暗殺されようとしているんだ」

「え、それやバくない!？」

とっさの嘘。いや、嘘でもないけど……

「え、先生とかには言ったの？」

「そ、それがね……先生も、もしかしたら暗殺者かもしれないんだよ」

「おお……それは大変な展開だね……」

案外、嘘って気が付いてない？

「まあ、多分嘘なんだろうけど」

いや、バレてたわ。

「でも、なんか大きな理由がありそうだね。特に言わなくていいけど……ちゃんと守ってあげなよ？」

「は、はい。わ、わかりました……」

「じゃあ、私は一回家に帰って、朝ごはん食べてから学校行ってくるね。欠席の連絡は私がしておくよ。じゃ、また学校終わったらね」

そう言うと、華燐は秘密基地を後にする。

た、助かった……

華燐が秘密基地を後にしたのとほぼ同時に、美紀子が起きる。

「ん………あ、ジャック君……おはよう……」

「あ、みき。おはよう」

「ここだと落ち着いて眠れるよう！」

これは……今すぐに家から逃げ出したいという心の表れだろう。

「なら、一生ここに住む？」

「さすがにそれは出来ないよ！」

笑いながら他愛もない会話をする。

今までに比べれば、これが出来るだけでも相当幸せだ。

「あ、そうだ、朝ごはん食べなきゃね……みきはパン派だからトーストでいいよね？」

「え、なんで私がパン派って知ってるの……？」

「あ、いや……風の噂で聞いた。うん。風の噂だよ」

やべ！ タイムリープ前の記憶をそのまま使っちゃった……

「まあ、とりあえずトーストでお願いしまーす」

「うん！　じゃあ焼きますか……」

俺は、幸いにも美味しいトーストの焼き方を知っている。

まあ、二度も言う必要はないか。

「……って、誰に言ってるんだ？」

「ん？　どうしたのジャック君？」

「いや、何でもないよ」

「さーさー、もう2枚も出来上がりましたよ！　美味しいトーストですよ！」

「お、いい匂いがしてきてますよ、楽しみ〜!」
俺はキッチンからトーストを2枚持って出てくる。

「じゃーん!」

「おー! いい感じの焼き加減じゃないの! ジャック君凄い!」

「それほどでも〜……じゃ、いただきます」

「いただきます!」

結局、自分で作ったけど、食べるのは始めてだ。

「……………うん。美味しい。ファットスプレッドの味がトーストに染みこんでる。」

「うわあああー!」

急に美紀子が悲鳴をあげる。

「ど、どうしたのみき!」

「……………お、美味すぎるよ! このトースト!」

「いや、切って水かけて焼いてファットスプレッド塗っただけだよ」

「い、いや、そのファットスプレッドっていう聞いたことのない奴のおかげで——」

「——ファットスプレッドってバターの事な」

「……………じゃあ魔法でも——」

「——使っていない」

確かに美味しいと思うが……別に普通だ。トーストであることには変わらない。

「私ね、お母さんが朝ごはん作ってくれないから、自分で作ってるんだけど、毎回失敗しちゃうんだよね」

これは……美紀子が自ら、母親の事を言った……？

「だから、ジャック君にとって普通の味でも、私にとっては、凄く美味しい……とっても特別な味なんだよ」

美紀子の口から母親の事を言わせている自分が情けない。

「そうなの？　じゃあこれからは毎日美味しい朝ごはん作ってあげるよ！」

「ほんとぉ!!　やったー!!」

俺は何も気にしていないような素振りを見せながら答えた。

Section3 契約

俺は、学校が終わるまで、美紀子と一緒に他愛もない会話をしたり、一緒にゲームをしていたりした。

「お、みき上手いね」

「ジャック君も！」

卒業式まで、大体3か月。

3か月の間、美紀子を守り続ける。

そしたら中学生になれる。

中学生になったら、俺は岡山県に転校する。

その時に美紀子もつれて、遠いところに行けばいい。

俺の家族は優しい。家族として、友達を迎え入れる事ぐらいしてくるはずだ。だから、3か月……勝負の時間だ。

「みき……？ 長い時間だけ……3か月待てる？」

「3か月……？ 卒業までって事？」

「うん。俺、中学生になったら岡山に転校するんだけど、ついて来てほしい」

「………お母さんの件、心配してくれてるの？」

「うん。このままじゃいけないと思ってるんだ。………もしかしたら……」

「お母さんに殺されるとかって？ そんな大げさな——」

「——違う！ みきが死んでからじゃ遅いんだよ！」

もう俺は過去に戻れないかもしれない。

それに、愛美が言ってた。

——「過去を変えられなかったら、罪の償いとして死んでもらうわ」

あれは幻覚だ。けど、美紀子を助けられなかったら、俺は未来に戻った時に、確実に消される。きっと警察に捕まって死刑とかにされちゃうんだろう。

きっと神が、そうするはずだ。

でも、神って一体……何なんだろうな。

「分かった。私……………ジャック君に一生ついていく」
「みき……………」

Section4 普通の生活

△3か月後▽

あれから3か月が経った。

卒業式には当然参加せずに、卒業証書だけ華燐経由でもらった。

「みき……………いままでよく耐えてくれた。……………ありがとう」

「私言ったでしょ？ 一生付いていくって」

今日は石川に別れを告げる日だ。

お母さんが車を森の近くに停めると言っていた。美紀子と一緒に岡山に引っ越す。

「じゃあ、行こうか。石川から……………お母さんから逃げよう」

「……………うん！」

秘密基地に別れを告げ、森を出る。美紀子の母親に見つからないように、周りを警戒しながら、車へと向かう。

俺は、森の近くにある車に乗る。

シルバーのミニバン。俺の父さんの車だ。

……まさか、この父さんが魔王になるなんて、昔の俺じゃ想像つかないよ……

「お待たせ！」

「よ、よろしく願います……」

「その人がジャックの言ってた美紀子さん？ 俺の運転見せてやるぜ？」

「あなた？ 安全運転でね？」

俺らは出発した。石川に……みんなに別れを告げて。

Section5 新天地

岡山に引っ越しをしてから1か月が経ち、遂に中学校の入学式となった。

俺と美紀子は、まるで兄妹のように生活していた。そして、同じ中学校へと入学する。

「……で、あるからして、皆さんは我が校の生徒として誇りをもって、未来へと羽ばたいていただく共に……」

俺からすれば、2人の関係は兄妹だが、周りから見ると恋人同士にしか見えないらしい。買い物に2人で行っただけで、ヒューヒュー言われたりしている。

「まあ、はたから見りゃ恋人同士だよな……無理はない……」

「私は恋人同士でも良いよ？」

「いや……2親等の結婚は出来ないよ……俺ら兄妹だし……」

「私たちは血縁関係にないよ？」

あ、そっか。

遂に自分でも兄妹と勘違いしていた。

「それだったら結婚できるな……」

美紀子がじっとこっちを見ている。

「……………わ、分かった。分かったよ！」

俺は覚悟を決める。

「……………俺は、みきを一生守り、幸せにし続ける。だから……一生ついて来てくれる？」

「……………うん！もちろん！私は一生ついていくよー！」

これは……告白に成功したって事……？

「じゃあ、一回帰ろっか。買い物も終わったし！」

「うん！ 帰ったら何する？」 なんだって私たちは……」

「恥ずかしいから言うなって！」

Chapter9 最期の約束

Section1 忘れ物

一緒に手をつないで歩く。

いつもの光景なのに……なんか……やっぱりいつもと違う気分だ。

一緒に歩道橋を渡る。

周りにはあまり人はいない。なんか、本当に恥ずかしくなってくる。

一緒にアスファルトの地面を歩く。

いつもの、アスファルトに芽吹くヒナゲシも、とっても綺麗な花に見える。

一緒に信号を待つ。

信号待ちの時間さえも幸せに感じる。

一緒に横断歩道を渡る。

右からくる車さえも俺たちの幸せを追いかけているかのように見える。

……違う。

俺たちに向かって、車は止まることなく、俺たち2人の事を轢き殺す……

Section2 審判

気が付くと、そこはとても暗い場所だった。

床と壁の境目がギリギリ見えるか見えないかの明るさだ。

「ジャック君……………」

周りは見えないが、人かいるのか？ 声が聞こえる。愛美の声によく似ている。

「さあ、審判の時よ」

明かりがつく。高いところから愛美が見下ろしていた。

「あ、愛美……………?!」

「ジャック君……………あなたは『みきを一生守る』と決心した。それなのに美紀子は死んだ」

「あれは、事故だったろ！ 俺は何も悪くないだろ?!」

愛美は何も答えない。ただこちらを見ている。

「違う……………あれは、わざとじゃないんだ！ 事故はわざとじゃないって分かるだろ!?!」

「審判を始めるわ」

愛美は俺を無視して話を続ける。

「なあ、答えてくれよ！ 俺は何も悪くないだろ?! なあ愛美！」

「……………」

愛美はこちらを軽蔑するような目で見る。俺の問いには答えない。

「愛美ってば!」

「……………あなたは償いを受けなければならない。あの車を誰が運転していたか知らないの？」

想像はつく。

「美紀子の母親よ」

「どうして……………」

「それはそうよ。娘が、よく分からない奴に誘拐されてるんだから、そいつを殺したいと思って普通よ。それに、美紀子の母親は美紀子を殺したいと思ってる」

確かに、俺がしたことは誘拐だ。

「大人なんだから、どこに愛美がいるか調べて、車で行くことぐらい出来るわよ」

もしかしたら、美紀子の母親は来ないんじゃないかとか……来たら児童相談所の人を呼ぼうとか思ってた。けど、安直だった。

「あなたは母親から美紀子を守ったと勘違いしているようだけど、母親の気持ちは何も変わってないわ。そう、美紀子を殺すことだけを考えてた」

「……俺は、誰も守れていなかったのか……？」

「そうよ。せっかく私がチャンスをおげたのに、それを無駄にした。ちゃんと守り切らなかったあなたの責任よ」

この世界は幻覚なのか？ それとも夢？

「あなたにはちゃんと罪を償ってもらう」

これは幻覚なんだ。愛美が俺の事を殺すとは思わない。

「……………さあ、契約の時間よ。ようこそ……………管理界 (Admin dimension) へ」
俺は、どうなるんだ？

「ジャック君。何を勘違いしているのかは分からないけど、ここは現実よ。私もここにいる」嫌だ。その言葉は聞きたくない。幻覚なんだ。夢なんだ。

「森の中にいた美紀子と華燐は偽物だけど、私は本物。ちゃんとあそこにいたわ」
愛美は……………一体何者なんだ？

「私が何者かは、あなたたちの考え通りよ」

……………あれ？ 俺今、声に出してたか？

いや、出してない。まさか…………

考えが読めるのか？

「お決まりの台詞ありがとね……………そんなに氣遣わなくていいよ…………」

「……………愛美、君は本当に何者なんだ？」

「それ聞いちゃう？ 聞いたら、全てが終わっちゃうよ？」

全てが……………終わる？

「あなたたちの考え通り、時空を操ったりしたのは私よ」

話が急展開過ぎて大変だ。

「けど、沢山ヒントを与えたのに、それに氣が付かなかったジャック君が悪いんだよ？」

「ヒント？」

「私が転校して、自己紹介をした時に、名前を言うのをかなりためらってたよね？ 小学5年生にもなって、名前を言うのをためらってた事、おかしいと思わなかったの？」

愛美は小学5年生の時に転校してきた。

そういえば、名前を言うのを恥ずかしくていたような気がする。

「それがヒントなの？」

「名前はあの時に作ったんだ。だから時間かかっちゃってたんだよ。『時』って漢字が名前に入っているのに、気が付かなかったの？」

時板愛美。たしかに名前に「時」が入っている。

だが、普通の人なら他人の名前に疑問なんか持たない。

っていうか、たかが自己紹介に、そこまで深く考えたりもしない。

「その考えが安易なんだよ？」

Section4 あづみん

「……そういえば、さっき言ってた『全てが終わる』って、どういう意味だよ」

「そのまんまの意味だよ。美紀子も千夜も弘明も華燐も蒼龍も、なんか動いたり喋ったりする木も、君も私も」

「あっ、そういえば木！」

愛美を探してくるように言ってから、一度も見えてない。

「あなたがタイムリープするときに、邪魔な存在かなくなって思ったから、あの木はタイムリープさせてないわ。ジャック君のいない過去に残ってるわよ」

「何故そんなことが出来るんだ？ それに、タイムリープの事まで……」

「……それはね、私が人間じゃないから………時空の管理者だからだよ」
時空の……管理者？

「私は、この時空の全ての時間軸を管理しているんだけど、最近無駄な時空が増えてきているから、上層部がリストラに近い形で、時空を消すことにしたの。時間軸の消滅ってやつよ」
時間軸の消滅。都市伝説系の番組で見たことがある。

ある時間軸を消滅させると、その時間に生まれたモノはなかった事になる。
もし、愛美が時間軸を消滅させれば、俺らは存在しなかった事になる。

「タイムリープとかの事を知ってるのは、私が時空の管理者だから。この時空に生きてる全ての生物の行動は履歴として残ってるのよ」

ますます訳が分からない。

「まず、最初に言うけど、あなたには死んでもらう。そしてその後、この時空を消す」
つまり、俺が今取るべき最善の行動は………

「………でも、俺は愛美を殺せない」

「……は？ 何言ってるの？」

「え、だって、これから生きていくには、愛美を殺すのが一番楽なんじゃないの？」

「ち、違うよ！ もっといい解決方法があるよ！ ちょっと考え直してよ！」

違うのか？

それとも、話し合いで解決するというのか？

「ジャック君が、私に『好き』っていうだけだよ」

「え」

それは一体どういう意味なんだ？ ふざけているのか？

……だって、今のって——

「——告白だよ」

えっ

Section5 幸せなカン違い

あ——もう……………余計に訳が分からない……

「私はただ、ジャック君と二人きりになりたかっただけなの」
目の前でこんなことを言われると……流石に恥ずかしい

「付き合ってください」

一言で言おう。状況がつかめない。

「でも、愛美は人間じゃないんですよ？」

「ジャック君を殺して、私は『永遠に』二人きりになりたいだけ」

まさか……

「時空の奥底で、ずっと二人きりだよ!!」

愛美が俺の手を掴む。

俺は離そうとするが、力が強く離せない。

そのままどこかへ連れ去ろうと、とんでもない速さで暗闇を飛んでいく。

「うう……意識が……飛びそう……」

飛びそうな意識に、後ろから声が聞こえてくる。

「……ック！」

ああ……誰が何を言っているのかは聞こえない。もしかしたら幻聴なのかもしれない。

「チツ、ついてきやがったか……」

愛美が舌打ちをして、何かを言ったのは聞こえた。

ギリギリの意識の中、後ろを見てみると……少しずつ明るくなっている気が……いや、

光が差し込んでいる！

「ジャックッ!!」

光の中から緑色の葉っぱがこっちに飛んでくるように見える。

分かる。生きる木だ。助けに来てくれたんだ……っ……意識が……

Section6 47#66

「俺は何のために生まれたのか。よく自問自答するが、答えが返ってきたことはない。ただ、今を生きていればそれでいい」という話を愛美にしたことがある。

愛美は「何をするべきかを考えるために生まれたんじゃない？」と言っていた。

俺は、今を生きれば良いと思っていた。

けど、それは間違っていた。ちゃんと未来を考えなきゃいけない。だから俺は決めた。

「生きる木、もう良いよ」

「……えっ？」

「俺は決めたんだ。これからは愛美と生きていく。それが永遠だとしても」

「……ジャック君！ 覚悟を決めたんだね！」

「何言ってるんだよジャック！ 正気か!？」

俺は正気だ。

俺が生きる理由は「何のために生きるのかを考えること」だから。愛美の為に生きる。

「愛美の為に生きる」という理由を考えたら、俺の生きる理由はなくなる。

なら死んでもいい。ただ今を生きればいいのだから。

「そうだよ！ ちゃんとジャック君は、みきを殺した償いとして、私と一生暮らすんだよ！」

「……けど、今の君は知らない」

「……えっ？ どういう事？」

「俺の知ってる愛美は、昔の人間になっていた愛美だけ。今のお前が、自分の名前を何度『時板愛美』と言おうと、今のお前の事は知らない！」

「ジャック！」

俺はポケットから小さな銃を取り出す。

生きる木には内緒で、ひまわりたと作っていた「時空ガン」だ。

相変わらず、ネーミングセンスは皆無だが、能力は凄い。

弾が当たった対象を吸い込み、別の時空へと送る。

愛美はこの時空の管理者なんだろう。だが、別の時空には別の管理者がいるのが鉄則。俺もよくわかんないけど……ひまわりたん曰く、この時空の管理権を失うらしい。

「ジャック君！ 私を裏切るの?! ちゃんと罪を償うんじゃないの?!」

「知らないな。昔の愛美だったら付き合ったが、今のお前は誰か知らないし、裏切りにはならないんじゃないのかな? それに、みきが死ぬシナリオを描いたのはお前なんだろう?」

「ジャック……難しすぎて何を言っているのか分かんないよ……」

まあ、無理やり口実を作っているから、自分でも何言ってるか分からない。

「Chao・愛美!」

俺は時空ガンを撃つ。弾は愛美に当たった。

「……そうなのね。じゃあせめて、一つお願いを聞いてもらってもいい?」

愛美は時空の壁に吸い込まれていく。

「……みきを、幸せにしてね」

愛美は吸い込まれていった。別の時空へと送られたのだろう。

……つまり、存在しなかったことになる。

つまり……全てが元に戻る。

「うおお!!」

時空の流れが速くなる。

このままじゃ、俺も吸い込まれてしまう。

「ジャック、掴まって！」

「ありがとう！」

俺は木の幹に掴まる。

「このまま時空を出るよ！」

時空を出ると、何事もなかった事になる。

つまり、美紀子が殺された過去は消える。

今度こそ、世界は平和になる。

Chapter10 エピソード

Section1 レプリカ（エピソード A）

「木です！ 二人合わせて……」

ここは……俺が作った事件相談所？

「……？ ジャック？ セリフ忘れたの？」

セリフって……まさか？

「ちょっと！ せっかく MeTube 用の動画を撮ってるのに……」

……時間が戻ってる！

事件相談所の紹介のちよつと前……つまり、タイムリープする前に戻ってこれた。
……愛美が消えたから、事件はなかった事になる。

「……やっぱり、事件相談所なんてやめよう」

「えっ……？ 急にどうしたの？」

「やっぱり、事件相談所を開く需要はないんだ。家に帰ろう！」

「まあ……ジャックがそう言うなら、やめよつか！」

愛美はこの時空から消えた。存在しなかったことになる。

つまり、美紀子の死はなかったことになる。

俺と愛美との契約は守られた。

「……………ちゃんと約束は守ったぞ」

「うん！ そうだね！ やっぱ、私の見込んだジャック君だけあるよ」

「愛美っ!？」

目の前には、消えたはずの愛美がいる。

「おまつ……………えっ……………!？」

「おじゃましてまーす♪」

もしかして、復讐でもしに来たのか？

「あ、怖がらないでね？ もう、この時空での管理権は失ってるから、この時空では真正正銘、普通の人間だよ？」

「な、何しに来たんだよ……」

「上層部の人たちが『この時空は残す』って言ってたよ。だから、皆は消えない。それを伝えに来ただけ！」

それは良かった。流石に、時空とかの話はよく分からないから、早々に解決してくれて良かった。

「で……愛美はこれからどうするの？」

「うーん………特に決めてないんだけど……そっちの『ひまわり君』の研究に協力しようかなって思ってるよ」

確かに、時空の研究をするなら、張本人の管理者に聞くのが一番早いだろう。

「じゃあ、私は戻るねー！ また今度会おうね！」「え、戻るってどこに？」

「あ……家なのか………ねえ、ジャック君………」
うん。分かりやすい。

「はいはい。何日でも泊めてあげますよ」

「やっぱりジャック君は優しいね!!」

昨日の敵は今日の友って事か……。

Section2 回答（ヒュローグ B）

「それにしてもなんだけどさ」

俺は愛美に疑問がある。それは一つ。

「ん？ どうしたのジャック君？」

「……愛美は、どうしてこんなシナリオを描いたんだ？ その……」

「なんで私がみき達を殺したかって事でしょ？ 理由はいくつかあるんだけどね……」

「俺と時空の奥底に行って、一緒に暮らすつてのも一つの理由か？」

これは愛美が、管理界で言っていた事からの分析だ。自分で言つてて恥ずかしくなつてくる奴だ……。

「それもあるけど……もっと大きな理由があるよ。……私の腹いせだよ」

腹いせで人を殺したり、時空を丸々一つ消そうとしてたの!? もう犯罪者じゃん！

「私は、ずっとこの時空を見てたんだけど、植物科が世界の実権を握っちゃうんじゃないかな……って思ったの。で、『このままだと世界が大変なことになるかもしれない！』って思って、植物科を崩壊させてやろうと思って、そこで私が思いついたの！ 『ジャック君を拉致監禁しよう！』ってね！」

サイコパスの思考……

「そしたら、きつと植物科の皆も、私の言うことを聞いてくれるかなって……」

「他に道は無かったの……？」

「うーん………私思いつかないや……他に方法があるの？」

「それは………」

ふと、樹木の匂いがした。室内なのに。これは………

「しょ、植物科に入れば良かったじゃん！」

「え!? わ、私が植物科に!?」

とっさに思いついたことだが……

「全然いいでしょ! ……………ねえ? 隠れてるつもりの生きる木君?」

「あつ、バレてた?」

どうせ戦術の何かを使って、姿を見えなくしてたんだろう。流石に室内だと匂いでバレバレなのに……

「まあ、ジャックが別にいいなら、僕たち植物科はいつでも! 誰でも! 大歓迎だよ!」
「って、生きる木も言ってるし……入れば?」

「ひまわりさんの研究にも協力したいし……入ってもいいかしら?」

「うん! もちろん!」

こうして、ジャックと生きる木は、新たなる仲間を迎え、また平和な日常を取り戻した。

△ 完 ▽

